171　仏堂　　**長谷寺　本堂　　一棟**　　江戸時代（1650年）

九間×九間（正堂・礼堂・相の間）入母屋造平入の正堂に、正面から左右千鳥破風付入母屋造妻入の礼堂大屋根が取付く。正面に舞台を張り出し、礼堂とともに懸造とする。

長谷寺は奈良中央、伊勢と大和を結ぶ古街道の北にある真言宗豊山派の総本山で、西国三十三箇所観音霊場第八番札所である。創建は諸説あって明らかではないが、奈良時代後期には伽藍が整備されていたとみられる。観音霊場として古代から信仰を集め、10世紀後半以降公家による長谷詣でが頻繁に行われ、鎌倉期には武家や僧侶、庶民を中心とした長谷参りが盛んとなった。

伽藍は初瀬山の山麓から中腹に広がり、東南に向いて仁王門を構え、それより登廊が続き本堂に達する。登廊両側には蔵王堂や水屋、参百余社、子院群が建つ。

本堂は南面し、その東西に大国堂、開山堂、鐘楼、愛染堂、三社権現など、西方の小高い位置に本長谷寺、一切経蔵、五重塔がある。長谷寺本堂は古代以来の観音信仰のもと、本尊を中心とする壮大な空間をつくり上げるとともに、正堂・礼堂・相の間からなる複雑な空間構成を巧みな架構、意匠でまとめ上げ、高い完成度をもつ。近世初頭における江戸幕府による大規模な寺院本堂であるとともに、わが国で広く隆盛した観音信仰において中心的な役割を果たした建築として、文化史的意義においても特に高い評価を有している。

奈良県　桜井市大字初瀬　　近鉄長谷寺駅から徒歩約15分